

新
刊
紹
介

For some in ancient books delight;

Others prefer what moderns write:

Now I should be extremely loth

Not to be thought expert in both.

土居真俊 著

『Search for Meaning

Through Interfaith Dialogue』

教 文 館、A5判
(二〇二頁、三〇〇円)

土居真俊教授は今年で六十九歳になられる。昭和十一年、同志社大学神学科を卒業以来、西陣教会、彦根教会等の牧会伝道にあたられ、その後シカゴ大学、ハートフォード神学院等で組織神学及び宗教哲学を学ばれ、昭和三十年来、神学部において組織神学を担当して今日に至っておられる。

その間、パウル・ティリッヒの研究を中心に、学内、外において他宗教との対話と研究を推進してこられた。日本神学界、及び宗教学界における最長老格である。

今回、同志社百周年を記念して出版されたこの著作は、土居教授の近年の神学的、宗教学的の思考や研究結果を英語でまとめあげたものである。これが英語で出版されたこと自体にも大きな価値があると言えよう。これは、同志社に限らず日本の学問の全般を見て言える事であろうが、学問的研究業績や結果を、日本語を越えて広く提供しようとする、ギブ・アンド・テイクの努力が欠けているのではなからうかと思われるからだ。もちろん、ただ英語で出版すればよいというものではない。国際的な研修と研鑽はどの分野においても不可避と思われる現代において、重要な国際語の一つと考える英語での研究発表の意味を考えなくては、という事である。

さて、本書は、「諸宗教との対話における意味の探究」とでも訳しうる題が示すごとく、ここ十一年、特に宗教研究所所長を兼ねながら研究をすすめてこられた同氏の

宗教思想がまとめられている。その思想とは、単なる比較宗教学的理論ではなく、他宗教との対話を通してキリスト教の独自性、特に宣教論を再検討したものである。

そして、その根底には土居教授のキリスト教信仰とパウル・ティリッヒの宗教哲学及び神学の影響を、明らかに読みとることができる。

ティリッヒは、自らの神学思想を特徴づけるものとして「呼応の方法（あるいは相関）」という表現を用いた。その背後に、彼は絶えず宗教と文化、神学と哲学、信仰と理性といったものの「交錯」を通しての思考的作業をふまえていた。彼にとってキリスト教の中心的使信は、人間の実存的問いと、その問いに対して最も深い意味を含んだ答えである新存在としてのキリストなるイエスなのである。

土居教授が第一部で主張する「意味の神学」は、すでに日本語で出版されているものの要約であるが、これが土居神学の骨格であろう。そして、それは第二部に集められているいくつかの小論文を結ぶ論点としての「宣教論」につながる。

急激に産業化、都市化される世界の中で、人間が生命の意味そのものを喪失してゆく時、それ自身が人間性の崩壊を引き起こす。そういった状態に直面して宗教はどうかあるべきか。何かなされねばならないのか。これは決してキリスト教に限定された課題ではない。土居教授が、他宗教との対話を通しての共同作業として、「意味の回復」の主張をされる根拠が、ここにある。

決してすらすら読める本ではないが、世界の神学界、宗教界に一つの刺激を与えることは確かであろう。

(深田未来生・大学神学部教授)

岡 満男 著

『新聞と写真にみる』

京都百年』

東洋文化社、新書判
二二九頁、七八〇円

京都は、日本の都市イメージのなかで群を抜いて高いあこがれの都市になっている。戦災をうけず、古い街並みと由緒ある

神社仏閣は、文化観光都市としての歴史的な価値を、内外に高めつつある。この京都の観光案内的な書物は数多いが、本書はまったく異色な歴史風俗史の味わいをもった内容で、過去百年——慶応四年（一八六八）から昭和四年（一九二九）の間、京都市内でおこった特筆すべきことを、編年順に、新聞記事と貴重な写真で綴り、さらに詳しい註釈をそれぞれのページごとに加えている。一年三六五日のうち、どのような記事を選択するかは、まったく、むずかしい問題であるが、その点、著者はすぐれたジャーナリストとしての長い経験から、各年代を通じて象徴的で興味ある京都らしい事件をとりあげ、明治・大正・昭和の長い時代の変遷を、具象的に活動大写真をみるごとく編集してある。新聞記事は、歴史家の理論や視点とは異なり、一日一日のできごとを記者の主観と筆力で、できるかぎり客観的描写的に読者の心をひきつけるように書かれてあり、その時代が生き生きと蘇（よみがえ）ってくる。ニュース性は一日一回かぎりのものとしても、その時代の背景を象徴している。それだけに本書は独創的で学

問的にも特殊な価値をもっている。

本書の第一ページは、「近藤勇の最後」である。近藤勇の首が三条河原にさらされた記事を「中外新聞」から集録し、明治維新の開幕と京都の近代化への歩みを「都鄙新聞」「大阪新聞」「東京日日新聞」「郵便報知新聞」「日本立憲政黨新聞」「京都絵入新聞」「時事新報」「日出新聞」など、いまは見ることもできない文獻的な新聞からとりあげ、文明開化といわれる当時の模様を庶民の目から彷彿（ほうふ）とさせるような記事で各ページが多彩に展開する。本書の集録で、とくにすぐれているのは、京都という古い習慣と習俗につつまれている都市が、各時代の先端的な役割やできごとを生起させているという著者の近代的指標の設定と鋭い感覚である。京都の交通、疎水の開拓、教育機関、海外交流、医療や産業の育成など、近代文化の基本になるできごとをぬけめなく追いつめ求めている。「チンチン電車誕生」（明治二八年二月三日）が「大阪毎日新聞」に紹介され、「朝来雨天なるにもかかわらず、新奇なるより、いかなるものならんかとて試乗する客非常に多く」という記事が

あり、市電が廃止される昨今の京都を知るものに深い感慨をおぼえさせる。また、若千二十二歳の田辺朔郎による疎水の完成の記事は、百年後の京都をささえる大きなエネルギーとなっただけに、興味深い。都市の「保存と開発」は、未来を開く大きな課題である。それには、まず、文化と自然の歴史を知らねばならない。本書は、著者のかぎりない京都への愛情と理解を感じさせるもので、京都に生活するすべての人々に、ぜひとも読んでほしいと思うのである。

(住谷 肇・大学文学部教授)

オーテス・ケリー 著

『よこ糸のない日本』

(サイマル出版会、B 6 判
二八九頁、一、二〇〇円)

一口にいえば、これは、そのころまだ二十歳代だった若き日のケリーさんの情熱とヒューマニズムにみちあふれた本である。私はさしせまった仕事を抱えていたのにも

かかわらず、この本を手にしたとたん、ぐいぐいとひきこまれて、とうとう夜を徹して一晩でよみあげてしまった。

この本は、戦争のなかの日本人／捕虜収容所の日本人／占領下の日本人／デモクラシーと日本人、の四章をまず本篇とする。日本で生まれ育ち、限らない日本への愛情を抱いた著者が、いずれ来るべき新しい日本の進路を考えつつ、ハワイの捕虜収容所で日本人に接した体験談、そして占領下の日本での体験談と感想とが、すなわち本篇の主題である。そして、さいごにそれから三十年を経た今日での感想として「『ニッポン』と天皇制」の一文が加えられている。

この本は、「私」という一人称で語られるが、北海道小樽市に生まれ、一五歳のころまで日本で育ち、日本の小学校へも通った「私」が、アメリカへ戻って五年めのアーモスト大学三年生のときに迎えた、あの真珠湾の日から語りはじめられる。子どものころからよく知っていたはずの日本人が行なった奇襲にたいするおどろきと困惑。やがて「私」は、愛する日本と戦うことの

ためらいを、ボストンに住んでいた湯浅八郎氏に相談に行ったうえで、海軍を志願し、日本を破り、そして日本を再建することを決意しつつ、情報将校としてハワイに赴任する。話の中心は、ハワイの収容所で接した数千の日本人捕虜との交流であり、終戦後に日本に戻った人たちとの交歓であるが、その間アッツ島やキスカ、あるいはサイパンでのエピソードもある。わずか二十歳をいくつか越えたばかりで、ハワイの捕虜収容所の責任者として、戦争が終わったのちの日本のことを考えつつ、収容された元日本兵たちと接していった著者の情熱には、まことに打たれるものがある。そこに収容された人たちの中に、式場隆三郎の血縁者がいたこと、その人の手紙を、終戦後ただちに式場家に届けたことが、三笠宮との出会いとなり、天皇への進言をしたことが、著者に占領下での活躍の場を与える。

この書は、四半世紀前にいちど刊行されているが、このたびの刊行は日米関係が曲がり角に来ているといわれる今日、そして戦後は終わったといわれる今日、その三十二年間の日本の歩みを反省する糧として、ま

ことに意義深いものがある。巻末にふされた三十年後の感想は、本文の著者の情熱からすれば余りに控え目であるが、それだけに読者にいろいろ考えさすものをもっている。

(笠井昌昭・大学文学部教授)

山田忠男 著

『インカの笛』

(NHKブックスジュニア、
B6判、一八一頁、八〇〇円)

今人類学の研究にたずさわっている私の仲間が、まだ大学を出たばかりの頃、つまり、敗戦の混乱の中で荒れはてた研究室に残って、「雑学事始」等と称して、いっしょに戦後の新しい道を模索していた頃、私たちは、「雑学」の進め方——つまり科学的思考の型——に二つの型があるといっていた。一つは「視覚型」、もう一つは「触覚型」で、共に抽象的思考よりもまず行動が先に立つことでは通じていたが、私は今、本書を読んで、その第三の型「聴覚型」をつ

け加えねばならないと思っている。著者山田忠雄氏はこんな人である。「むずかしい理屈はさておき、古代の音に対するあこがれや、古代の音を再現する楽しさをわかっでもらう為に」筆をとった（あとがき、とあるように、南米旅行からの土産にもなった一本のふしぎなインカの土の笛を手にして、著者はその形態的考証と共に、いちばん大事なことは、「これは音を出す為の楽器であり、楽器は、これが何のために作られ、どうして吹かれ、聴く人たちがどう思ったのか」であり、さらにインカの新旧三つの、竹・土・石の笛を吹いて「古いほどの笛の音は美しい」と、著者の「昔の音」へのあこがれをのぞかせている（はじめに）。そんな楽器と人類の歴史とのかかわりありを、第一・二章で書かれている。第一章「大昔の暮らし」で、音楽の奏でられた「舞台」としての、二百万年の人類の進化史を、著者は人類学者の立場からまとめ、第二章「音楽の始まりとその頃の楽器」では、音楽家としてのもう一人の著者が、音楽の起源とその発展を述べている。人類にとって音楽は言葉だけの世界に新たに外か

新島襄研究参考図書

My Younger Days 同志社校友会

新島先生書簡集（森中章光編）

同志社校友会

新島先生書簡集―続（森中章光編）

同志社校友会

新島襄書簡集（同志社編）

―岩波文庫
岩波書店

新島襄先生（徳富蘇峰著）

同志社出版部

新島襄―人と思想（魚木忠一著）

同志社出版部

新島襄（岡本清一著）

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰（森中章光著）

同志社

同志社九十年小史（同志社々々史料編集所編）

同志社

雑誌「新島研究」

同志社新島研究会

新島襄（和田洋一著）

日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載

ら登場したものでなく、著者の仮説によれば、「もともと音楽は言葉の中に混然と一体であったもの」であり、二百万年の人類の歩みの中で、狩猟・採集時代から農耕時代に移り（著者はそれを「人類の生活が「人間の暮らし」に移るといふ使いわけをしている」、生活が豊かになってゆく間に、「喜びにつれ悲しみにつれ、あるいは緊急の場合や静かなとき、それまであった音楽的要素がしだいに言語から分かれていった」と説いているのはおもしろい。そして音楽は、「合

図」としてはじまり、「打ちもの」でリズムと音の高低を、次に「吹きもの」で音のハーモニクスを、最後に「弾きもの」で自由なメロディと複雑な演奏を、人間は獲得した。

このような形態論に対して、第三章「何を美しいと感じたか」、第四章「笛を吹こう」で「昔の音に対するあこがれ」、「自分で音を出してみる事の意味」、「美しい音とは何か」という著者の考えを通じて「笛吹きのおすすめ」を述べると共に、西洋偏重の考え方をいましめている。第三章に展開される文化感や日本音楽論は、ジュニア向き

ではないかも知れないが、興味深いものである。あとがきに、音楽行政に対する提言と、豊富な参考文献もあり、異色の音楽入門書であろう。

ここであらためて気がつくことは、筆者が著者を「聴覚型」としたのは、著者が科学の手法として音を用いることではなく、「著者がこよなく笛の音を愛すること」によって、問題の提起と追求があり得たということを確認しておきたい。なおはじめに断るべきことであったが、京大理学部、そして京大オーケストラの大先輩である著者に対する用語としては日本的礼を欠く点もあるが、第三者の立場を通じた点をお断りしておく。ついでに、今私は、本書を通読し終って、著者の還暦のお祝いの席に招かれ、著者が秘蔵の金色のフルートを、夫人のハープの伴奏で晴れがましく奏でられた姿を思い出している。それは、氏の六十年の讃歌であったと共に、人間の暮らしの中の、昔の音へのロマンが秘められていたことを思い知るのである。

（和崎洋一・女子大学嘱託講師）

新島襄記念

タブレット

一八七四年十月、新島襄がアメリカ伝道協会第六十五回年会において、日本にキリスト教主義の大学を建てる決意を熱烈に訴えた教会の名前は永く明らかでなかったが、一昨年、大学文学部のケーリ教授が米国に休暇帰国の際、バーモント州ラットランドにあるこの教会をおとずれ、後、ラットランドの地方新聞「Rutland Weekly Herald」（一八七四年十月十五日付）が届けられて、当時の模様が詳細に確認された。

その後、ケーリ教授の尽力と、タトル氏（米国タトル出版社）の資金援助によって、この歴史的な教会 Grace Congregational United Church of Christ に、新島襄を記念するタブレットが掲げられることになり、六月二十七日、同教会において、除幕式が挙行された。（『グラビア頁参照』）